た。大家新進二十七氏が各々その蘊蓄を傾けて一堂に會した姿は、人々の期待を裏切らぬ壯觀である。我國歴史上の誇りである明治維新の意義過程があらゆる方面から論ぜられて盡くせりの觀がある。通讀後の一感想として維新史は三上博士が序文において指示さるゝ如く、今日は何等の制肘さるゝ事なく學問對象となり得て、又特殊な事情から諸方面の關心をひいて流行のものとなつて居る。然しこの事は同時に科學的に正しく認識され始めた事を意味しない。此等の諸篇を通讀して或る複雜さについて不思議な印象を受けるのも、對象において變化あるのみでなく取扱ふ精神に多く異にする所あるによるのであらう。これはまた現代における維新史研究についての混沌の姿を示してゐる。然し稍ともすれば回想錄的にあり勝ちなこの時代について、總てに科學的態度を求めるのは不可能であらう。あるものについてはこゝに提出された事實の闡明がやがて行はるべき維新史研究の手だてとなる事をもつて滿足すべきであらう。編者の意も亦こゝにある如く思はれる。さうして「今日において」(圏點編者による)求めらるゝ最高のものとして、現今の維新史研究の記念として比類なき價値を持つ。尙諸編が正しく整序されて綜合的理解に便ならしめた編者の意企を多として、維新史研究家に推薦する。(菊版八五二頁、三・八〇、富山房發行)〔藤〕

◉近江奈良朝の漢文學

本書は故岡田正之博士が大正九年に東京帝國大學へ提出された學位論文で、本年七月二十八日同博士の三週忌辰に當り、遺族友人及び門生が相謀つて記念として東洋文庫論叢第十として出版されたものである。博士は支那傳來の漢文學が我國民の性情志氣に與へた影響は頗る著大にして更に我邦に生れた漢文學が我が國民思想の上に一段の切要なる感化を及ぼしたものであるにも拘はらず世人は動もすれば我邦に生れた漢文學を我が國文學史上より疏外せんとするは我が祖先の苦心を沒却するものであり我が國文學の範圍を狹くするものである。故に其の變遷の跡を明にし醇健なる思想と高雅なる趣致とを後來の國民に傳へるは現代國民の一大義務であるこの見地よ

り我邦の漢文學の逕路を討ねんとし、その第一着手として近江奈良朝のそれを研究されたのである。全編は序說の外に第一編由來、第一章典籍の傳來、附說漢字傳來以前の文字の有無、漢文の讀法、第二章歸化氏族と漢文學第三章推古朝の遺文、附說憲法十七條に就て、第二編學風、第一章學校及び貢舉、第二章聖學及び人才、第三章學術の氣風、第三編文章、第一章記紀及び風土記、第二章養老令、第三章各種の文體、第四編詩藻、第一章詩と詩集、第二章懷風藻、第五編影響、第一章漢文學と萬葉集、第二章宣命祝詞と漢文學の諸編より成つてゐる。就中憲法十七條と懷風藻の研究は博士の最も力を注がれたもので、前者に就ては之を甲子の發布と讖緯說、十七の數と陰陽思想、法家思想の三項に分ちて論じ、その發布に十二年說と十三年說とあれども十二年甲子を正とし十七條の數及び立法の根本思想は儒佛二敎以外に法家思想が潛めるものとし、懷風藻に就ては之を選者と其の文辭、編次と顯晦、詩形、詩想、詩式の五項に分ちて觀察し、奈良朝の詩は淳樸にして、技巧を弄せる平安朝の詩の上に出づるものあり、思想の薄健にして氣象の敦樸なるは、其の至れるものに至つては漢魏に並び隋唐にも比すべきものがある。殊に吾人をして感歎せしめるものは朝紳高僧の努力、向上的精神であると論じ、尙ほ附錄として懷風藻詩體韻字考が添へてある。全編を通じて廣く和漢の諸書を引用して漢文學の傳來以來の發達、我が國民思想に及ぼした影響を精細に考究論證してあつて學徒を啓發せしめるところ多く特に文學史家の一讀を要するものである。（菊版假綴三四五頁、東京、東洋文庫發行、價參圓）〔松野〕

◉風俗史の研究　櫻井秀著

良著のほまれ高き平出藤岡兩氏の日本風俗史出でてより三十餘年、國史學の進步著しきものあるに拘らず、その一分科風俗史に以後加ふるものあるを見ない時、こゝに今文學博士櫻井秀氏の近業を蒐錄せる「風俗史の研究」の刊行を見るは大いに慶賀すべきものであらう。收むる所のもの「平安朝兒童の精神生活」より「蓮華王院通考」に至る三十五篇、何れも着目すべき研究であるが、多種に